

西田哲学館ニュース

第2号 (2005/3/12)



李登輝前台湾総統が来館しました

平成16年12月30日(木)

観光のため日本を訪れていた台湾の李登輝前総統が、平成16年12月30日、哲学館に来館しました。李登輝氏は、自らの政治思想の基盤となるのは、西田哲学であると語ります。哲学館ならびに西田幾多郎の墓を訪れ、感慨深げな様子でした。

李登輝氏と日本、そして西田幾多郎

台湾の前総統・李登輝氏が、この年末年始12月27日～1月2日にかけて日本に「観光」に訪れ、その中で12月30日に、西田哲学館に来館しました。

李登輝氏は、日本が台湾を統治していた時代の台湾県に生まれ、学生時代を京都大学農学部で過ごし、終戦を日本軍司令部付き見習士官として名古屋で迎えました。

李氏にとって、平成13年の心臓病治療に来日したことを除けば、60年ぶりの日本訪問でした。

名古屋・京都・石川を一週間で移動する中で、最初の旅行計画では、和倉温泉から特急に乗って、石川県を離れることになっていましたが、李氏は「西田先生の故郷に行く」と言って西田哲学館訪問と西田幾多郎のお墓参りにかほく市を訪れました。

当日は名誉館長の大橋良介先生も来館して李氏を案内し、二人で西田哲学の「場所の論理」についての対話をし、企画展「禅と西田幾多郎」も一緒に観覧しました。

西田幾多郎への思い

その李氏自身の旅行手記がVoice3月号に掲載されましたのでそこから一部を引用します。

...西田先生は私が長年私淑している思想家で、京都帝国大学の学生時代に先生から直接講義はうけてはいないが、その著作は何冊も読んでおり、いまも私の思想や行動における一つとなっている。

私が西田先生を尊敬するのは、西田先生が明治維新後の近代日本において、「いかにすれば日本が発展するか」を考えつづけた人物だからである。...西田先生は、先生の基本的な着眼点である「場の論理」を用いて日本人のアイデンティティを説き、国家としての日本の行き方を考えたのである。



西田博士の墓を参拝する李登輝氏(中央)



哲学館内を丁寧に見学する李登輝氏(右)

そして李氏は、台湾の現況を嘆き哀しむのではなく、そのアイデンティティの確立に向けて、西田哲学がその助けとなると言います。

哲学館への思い

また李氏は、哲学館の建物自体についてもコメントをしています。

建物は世界的な建築家、安藤忠雄氏の設計で、日本らしい静けさを感じさせる非常にシンプルなものであった。装飾はほとんどなく、壁にしてもタイルを貼らず、コンクリート剥き出しのままである。禅の一つの姿を表現した建物といえる。庭園も建物に劣らず見事で、開館は2002年とのことだが、今後もっと有名になるのではないだろうか。

安藤建築の中にある伝統的な「日本らしさ」をしっかりと理解すること一つを見ても、李登輝氏の日本理解の深さが感じられます。

目次			
李登輝 前台湾総統が来館	1	平成17年度 事業予定	6
特別企画展「禅を知る」開催	2	(予告) 西田幾多郎哲学講座 / 寸心読書会	6
野外学習 長野方面	4	(予告) 第25回夏期哲学講座	7
クリスマスコンサート	5	平成16年度の寄附・寄託・購入品	8
西田幾多郎博士作品を吟ずる第2回全国吟詠大会	5	編集後記 / アクセス	8

特別企画「禅を知る」が開催されました

平成16年11月27日(土)～
平成17年2月27日(日)

企画展示・特別講演会・映画上映会・新春坐禅会

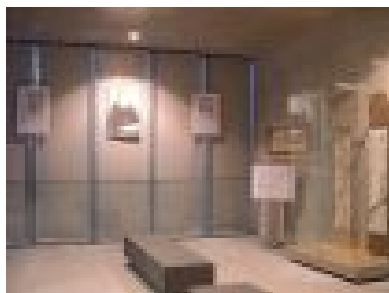
企画展示だけでなく、講演会・映画上映会・坐禅会を組み合わせ、四つの場面で「禅」に触れることができる連続企画を開催しました。「企画展示」では、二階展示室奥に特別展示室を作り、哲学館所蔵の禅に関する西田直筆の「書」を展示し、その意味を知りました。「講演会」では、日本そして禅のイスラームとの関わりと世界的な役割を学びました。「映画上映会」では、外国(ドイツ)人から見た「禅」への憧れ・想いを知りました。「坐禅会」では、ただ坐るということを経験してみました。

哲学館と企画展

この「禅を知る」は、哲学館が平成14年に開館してから、最初の「企画展」になりました。友の会の皆様は既にご存知でしょうが、哲学館には、普通の博物館・美術館にあるような「企画展示室」というものはありません。その代わりではありませんが、人物記念館としては十分に大きなホール、そして研修室・和室があります。つまり、設立当初から講座・講演会などを事業の中心にした博物館であると言えます。

近年、今まで企画展示を繰り返していた「博物館」が、さらに生涯学習の場として、新しい役割を持ち始めています。参加型イベントや講座、出前講座の充実などです。哲学館は、その中で「哲学の博物館」という新しい試みとして開館し、上記の理由もあって、講座・講演会などを主に事業展開していました。

とは言いながらも、やはり「博物館」です。年に一度ぐらいは「企画展」をしたらどうかという話が開館当初からあがっていました。そこで企画展示室を作る準備から始め、開館2年目で「企画展」を開催する運びとなりました。



企画展「禅と西田幾多郎」風景

テーマは「禅」に決まり、哲学館の性質上、自然と講演会が連動することになりました。さらに、今年度の夏期哲学講座で好評だったホワイエでの「坐禅会」を一般向けとして加え、坐禅をテーマにしたドイツ映画「MON-ZEN」も結びつけました。

こうして、この企画は、展示を中心にしながらも、ホールやホワイエなどを使った、やはり哲学館の性格「見る、行う、考える」が出た連続企画となりました。

企画展「禅と西田幾多郎」

平成16年11月27日(土)
～平成17年2月27日(日)

企画展示室は、展示棟2階奥のEVホールの壁面ガラスにスクリーンを下ろして作成しました。そこに展示ケースを入れて、西田の禅に関する書を十点展示しました。展示した書は「廓然無聖」(右上チラシ)や、その他「柳緑花紅」「道不属知不知」「一夜落花雨満城流水香」「電光影裏斬春風」「百花香」などです。

そして各々の書に対して、説明をした小冊子を印刷し、来館者にお配りしました(期間中にいらっしゃることが出来なかった方は、当館HPにてPDFファイルをダウンロードできるようにしますので、よろしければご覧下さい)。

また、展示期間中は、例えば「禅は音楽なり、禅は美術なり、禅は運動なり」等の西田の禅に関する言葉を日記等から抜き出し、館内にパネル展示をしました。企画展示中には938名が観覧しました。右に出展品の一つを紹介します。



「禅を知る」チラシ(右軸は「廓然無聖」)



柳緑花紅(やなぎはみどりはなはくれない)

柳は緑の糸を落とし、花は紅色に咲いている。何の変わりばえもない春の情景ですが、その当り前の日常生活の中に、真の美しさを見ることができます。目の前の柳はそのまま緑でよいし、花はそのまま紅でよい。わざわざ柳と花を比べて、どちらが美しい、どちらが優れているのではなく、それぞれがそれぞれで在るがままでよい。人間も同じことです。

そうは言っても、世の中にはたくさんの「区別」があります。その区別から、差別・比較・優劣・競争が生まれてしまいます。禅では、そうした区別(分別)を避けますが、だからといってその区別を見ないふりをすることではありません。むしろ、真実のままに見れば、その違いはくっきり浮かび上がってきます。やはり柳は柳であって、花は花です。無理に柳を花だと思っても、同じモノだと思ってもありません。それぞれにはそれぞれの個性があり、その個性を生かしたまま、そこに真実を見ればよいのです。ただ、そこには優劣も競争もない、個々があるがままに生きている世界がひらけています。

(小冊子「禅と西田幾多郎」より)



講演会

「禅とイスラーム」

講師:東隆眞住職(大乘寺)
平成16年11月27日(土)

特別企画初日の講演会には、前駒沢女子大学学長(文学博士)であり、現在は大乘寺(金沢)のご住職である東隆眞(あずま りゅうしん)老師を講師にお招きして、「禅とイスラーム」と題する講演をしていただきました。



講演会「禅とイスラーム」の東隆眞住職

日本におけるこれまでのイスラーム研究に関して、実は禅宗が大きく寄与している事実や、イスラーム神秘主義と禅との共通点などが紹介されました。また、現在のキリスト教とイスラームの対立構図とも言える世界情勢の中で、日本の禅仏教が世界平和に貢献できる可能性が説かれました(講演内容については、今後の『点から線へ』に掲載予定です)。

参加者は約100名ほどでした。

映画上映会

「MON ZEN」

平成16年12月4日(土)



人生に迷ったドイツ人兄弟が、長年の夢だった日本の禅寺への旅に出て、石川・門前へと向うロードムービー。

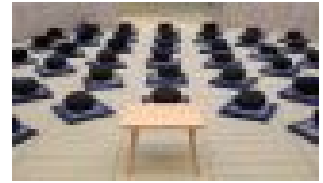
途中、東京で迷いながらも、やっとのことで石川県門前の總持寺祖院(そうじそいん)までたどり着き、思い悩みながらも本物の修行を経験します。

全く性格の違う兄弟が、それぞれに悩み、実際に總持寺祖院で雲水達と一緒に真面目に修行する姿は、フィクションのコメディのようで、どこかシリアスなドキュメンタリのような様子でした。「禅(ZEN)」に対する、西洋からの強い憧れを感じながら、楽しく禅に触れることができる映画でした。

鑑賞者は約200名ほどでした。

新春坐禅会

平成17年1月10日(月)



大乘寺から借りた坐禅用の座蒲

雪が降り積もる中、朝9時から哲学館の地下ホワイエで、新春坐禅会が行われました。

地元宇ノ気中学校の剣道部員9名を含む、35名が参加しました。



坐り方を実演により説明

今回は、大乘寺の禅僧に来ていただき、まずは実演付きで丁寧な、足の組み方や手の置き方を指導していただきました。その後、参加者は、鐘の音を合図に20分余り、静かに坐禅をしました。

続いて、ホワイエにて、講演会と同じく東隆眞住職に「正法眼蔵坐禅儀」(道元が坐禅を行う環境や心構えが著された書)について講話をいただきました。



禅僧と一緒に坐禅

出前講座(アウトリーチ)

地元老人会に「西田幾多郎の禅語」を出前講話

平成17年1月15日(土)・2月15日(火)



哲学館がある「かほく市内日角」の隣の地域「かほく市大崎」の老人会「いきいきサロン」で、大熊専門員が、特別企画期間中に二回、地元公民館で出前講座をしました。

一回目(1/15)は「西田幾多郎の生涯」、二回目(2/15)は実際に書を持参して「西田幾多郎の禅語」と題して、企画展示中の書や言葉について説明しました。

西田幾多郎哲学講座 野外学習 長野方面

平成16年11月13日(土)～14日(日)

今年度の野外学習は、18名の参加者と共に、西田幾多郎ゆかりの地である「長野」を訪れました。

(コース概要) 11/13(土): 豊科近代美術館 大王わさび農場(昼食) 高橋節郎記念美術館
豊科生涯学習センター 善光寺宿坊「淵之坊」(宿泊)

11/14(日): 善光寺(お朝事参拝) 長野県信濃美術館・東山魁夷館 松代(昼食・真田家宝物殿・
武家屋敷) 小布施(自由行動;北斎美術館など)

西田幾多郎と長野

長野と西田幾多郎には深い繋がりがあります。昔から教育に力をいれていた信濃には、今年118周年をむかえる信濃教育会があります。その教育会が、大正5年8月、信州の元・小学校教師であり、当時京大生で西田の弟子であった務台理作に間に入ってもらい、西田に講演を依頼しました。これが西田と長野の縁の始まりです。

その後大正9年に、長野の教師達は「信濃哲学会」を創設し、8回にわたり西田の講義を受けています(長野で4回、京都で4回)。地方での講演を好まない西田が、このように長年に亘って度々講演を行ったのは、教師達の熱心さに打たれたためだといわれています。その後、信濃哲学会での講演会は、西田の弟子たちによって続けられました。

信濃教育会 生涯学習センター



生涯学習センター内

信濃教育会「生涯学習センター」は、長野市で長年信濃の生涯学習の拠点であった「信濃教育会館旧本館」が平成2年に豊科町に移築復元して設立されました。

移築先は、信濃教育会に関係の

深い西田幾多郎の詞碑が立つ豊科町高家(たきべ)の旧高家小学校跡地になりました。

建物は、登録有形文化財に指定されており、信州あずみ野生涯学習塾や生涯学習講座などがひろく開催されています。

西田幾多郎 詞碑

無事於心 無心於事
物となって考へ 物となって行ふ



今ではその「生涯学習センター」の敷地となった公園の中にあるこの句碑は、昭和15年の皇紀2600年の記念事業として、西田に揮毫が依頼され、建立されました。その当時は、軍人や政治家の記念碑が建てられることが流行でしたが、教育・学問を愛する豊科・高家の人達は、哲学者・西田幾多郎に揮毫を依頼したのです。この詩碑は、西田の記念碑の中で、唯一存命中に建てられたものです。

揮毫され刻まれたのは「無事於心無心於事 物となって考へ物となって行ふ」という言葉で、その頃の西田の論文に出てくる、本人にとっても重要なキーワードです。

生涯学習センター内には、その他に西田や天野貞祐・阿部能成の直筆扁額もありました。

西田幾多郎像

豊科近代美術館

豊科近代美術館に展示されている「西田幾多郎像」に会ってきました。石川県七尾市出身の彫刻家・高田博厚による作で、全国では他に学習院大学が収蔵しています。



善光寺(宿坊・お朝事)・ 東山魁偉・松代・小布施

今回の野外学習は、この他に、初日には映画「夢」(黒沢明監督)のロケ地となった「大王わさび農場」、漆芸家(文化勲章受章)の「高橋節郎記念美術館」をめくり、善光寺の宿坊「淵之坊」に泊まりました。二日目の早朝には、善光寺のお朝事も体験し、その後、「長野県信濃美術館・東山魁夷館」を堪能した後、松代・小布施を訪れました。



善光寺お朝事風景

来年度の野外学習は、北陸・能登方面を予定しています。詳細は未定ですが、訪れたい場所がありましたら気軽に哲学館までご連絡ください。



コンサート・各種イベント

クリスマスコンサート 平成16年12月10日(金)

昨年にひきつづき、クアドリフォーリオによる弦楽四重奏のコンサートが行なわれました。大澤明さんの気さくなトークで演奏曲の解説をはさみながら、楽しく気軽な演奏会となりました。ホールでの演奏の前には、地下一階の円形空間「ホワイエ」でのプレコンサートも行われ、響きの違いを楽しむこともできました。

ハイドン・モーツァルト・ベートーベンなど本格的な四重奏曲を聴き、最後には皆できよしこの夜を歌いました。

演奏者：クアドリフォーリオ（＊四つ葉のクローバー）

ヴァイオリン 坂本久仁雄

ヴァイオリン 上保朋子

ヴィオラ 石黒靖典

チェロ 大澤明



ホールコンサート

第2回全国吟詠大会 平成16年10月3日(日)

西田幾多郎の作品を吟ずる第2回全国吟詠大会が行われ、156人の出吟者の皆さんが日頃の練習の成果を披露しました。指定吟題は11題で、その中から数題を自分で選び吟ずることになっています。特別吟詠として、第1回大会の最優秀者が吟じました。入賞者は以下の通りです。

〔最優秀賞〕(石川県知事賞)

片山由加里さん

〔優秀賞〕

守友文子さん、馬淵みや子さん、西尾清子さん、折戸修さん

山田順子さん、上村美德さん、藤井智恵子さん、北弘子さん

坂井他美子さん、綾村弘子さん

〔寿賞〕

喜多久雄さん、水本ちづ子さん、砂山春江さん

南勝二さん、松柳豊志さん



会場の様子

出前講座（アウトリーチ） 立志式での西田幾多郎歌の解説

平成17年2月2日(日)

かほく市内3会場で開催された「立志式」において、西田幾多郎自作の歌が刻まれた筆立てが記念品として全中学2年生(354名)に贈られ、各々の会場で奥野良雄館長・大熊専門員が、歌の解説を行いました。

人は人 吾は吾也 とにかくに
吾が行く道を 吾は行なり

65才でむかえた昭和9年元旦の作。世の風潮に安易に追随せず、ひとり思索の道を淡々と歩む心境が詠まれている。歌碑は京都法然院前「哲学の道」に建っている。



解説をする奥野館長



平成 17 年度 事業予定

西田幾多郎哲学講座(石川県民大学校)

西田幾多郎の人物・その哲学を中心にしながらも、そのみにとらわれることなく、様々な角度から宗教・芸術・倫理などについて学ぶ「哲学講座」。県内外の大学教授・名誉教授ら8人の講師を招いて、全12回の一般人対象の哲学入門講座として、人間とは何か、生きるとは何かを学びます。最後には西田幾多郎ゆかりの地を訪ねる1泊2日の野外学習も予定しています(希望参加)。

5月21日(土)	浅見 洋(石川県立看護大)	老いと思索
6月11日(土)	遊佐 道子(西ワシントン大)	『万屋人間夢 天辺弧月明』 西田幾多郎先生の弁証法的世界を詩的表現を以って考えてみる
6月25日(土)	岡崎 文明(金沢大)	哲学入門:古代ギリシアの哲学を中心に
7月2日(土)	岡崎 文明(金沢大)	古代ギリシアの哲学と禅の哲学(続)
7月16日(土)	橋本 隼男(金沢工業大名誉教授)	運命と絶望 『オイディプス王』に学ぶ
9月17日(土)	秋富 克哉(京都工芸繊維大)	ハイデッガーの問い
9月18日(日)	秋富 克哉(京都工芸繊維大)	「われ」と「われわれ」 和辻倫理学に学ぶ
10月1日(土)	杉本 卓洲(金沢大名誉教授)	仏像のはじまり 阿弥陀仏像にちなんで
10月15日(土)	米山 優(名古屋大)	西田幾多郎は個というものをどう考えたか?
10月16日(日)	米山 優(名古屋大)	日本独自の創作活動 連句の話
10月22日(土)	鈴木 康文(石川高専)	西田幾多郎が学んだ明治の教育制度
11月5日(土)	浅見 洋(石川県立看護大)	西田幾多郎の生涯 四高教授時代

第 61 回寸心忌 記念講演会 平成 17 年 6 月 11 日(土)

講師:遊佐道子氏(西ワシントン大学教授)

青森県生まれ、郡山と仙台で育つ。国際基督教大学卒業後カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校博士課程修了(宗教哲学・哲学博士)。現在西ワシントン大学外国語学科教授。著書・論文多数。『西田哲学選集別巻1(燈影舎)』では西田幾多郎の伝記を細かに記載し、鮮やかに浮かび上がる人間像を描き出した。

寸心読書会 毎月第2土曜日 14時~

講師:田邊正彰氏(金沢学院大学教授)

1949(昭和42)年に始められた、一般人を対象とした西田幾多郎に関する本を読む読書会です。16年度から田邊正彰氏を講師に招き、月1回のペースで丁寧な解説付きで読み進んでいます。現在のテキストは、『西田幾多郎随筆集』(上田閑照編)です。日時は、原則的に第2土曜の午後2時からですが、変更の可能性がありますので、参加希望の方は事前にお問い合わせください。



読書会：4階会議室



第25回 夏期哲学講座 8月20日(土)～23日(火)

1981年から続く「夏期哲学講座」の開催日程が決まりました。各地から7人の教授陣を講師に迎えて、西田哲学を中心に哲学・宗教・倫理を学ぶ3泊4日の合宿型の集中講座で、受講者は全国から集まります。興味のある方は昨年の資料をお見せしますので、お気軽にお問合せください。



コース別・テーマ別研究会の様子（研修室・ホールステージ上・展望ラウンジ・隣接施設の和室にて二日にわたって行われました）

西田哲学会 第3回年次大会 7月23日(土)～24日(日)

西田哲学会は平成15年に設立されました。第1回年次大会は京都で、第2回年次大会は東京（上智大学四ツ谷キャンパス）で開催され、3回目の今年は哲学館で行うことになりました。今年も、初心者むけのプレカンファレンス、講演会、研究発表、海外報告、シンポジウム等が予定されております。



インターナショナル・アコースティックギターライブ

4月22日(金) 18:30開場 19:30開演

一般 2,500円、学生 1,500円(当日500円増)

友の会割引あり

世界各地で活躍するギタリスト・中川イサトさんが各国のプレイヤーと行なう日本ツアーが今年も開催されます。今年も、岸部眞明さんとアメリカのアンディ・マッキーさんが加わります。ギターの音色が美しく響くホールで、懐かしい音色を楽しんでみませんか。



その他の事業

寸心忌 6月7日(火)
特別講演会 3回予定
博物館実習 8月16日(火)～24日(水)
第3回全国吟詠大会 10月上旬
企画展 11月末～2月末
映画上映会+ワークショップ
西田・ハイデガー国際シンポジウム 3月予定

演劇「おーい幾多郎」再演決定！

四高教授であった頃の西田幾多郎と、その家族を描いた演劇「おーい幾多郎」が、再演されることになりました。舞台は明治36年金沢の長土塀。家長として西田家を背負い、まわりの人たちの人生をも背負い奮闘する幾多郎を中心としたヒューマンドラマです。

日時：5月上旬予定
場所：金沢市民芸術村
詳細は哲学館までお問合せください。



寄附・寄託していただきました

直筆書軸・書簡多数

河合良一・三良両氏より寄附
西田幾多郎が四高教授時代に兄貴分・相談柱として設立にかかわった塾に「三々塾」があります。その塾で学んだ秀才であり、後に政治家・企業家(小松製作所中興の祖)となった河合良成のご子息であるお二人から、掛軸4幅・書2幅・短冊1葉・拙速書帖1冊・いたずら書き1冊・書簡等18通を寄附していただきました(H16/4)。

愛用の二重廻し

米澤健次氏より寄附
米澤氏は、西田幾多郎の妻・西田琴さんが津田塾大学で学んでいた時の後輩のご子息になります。戦後物資が少ない頃、米澤家に泥棒が入り衣服を全て盗まれた時、琴さんは西田が愛用していた「二重廻し」を米澤家に差上げたといいます。その「二重廻し」を寄附していただきました(H16/5)。

哲学関係書籍387冊

上村武男氏より寄附
『気配論-自覚線上における西田幾多郎』、『哲学徒と詩人』、『西田幾多郎過程する球体』の著者であり、須佐男神社(兵庫県)の

宮司でもある上村武男氏より、図書387冊を寄附していただきました。中には「アテネ文庫」など現在入手困難な図書も含まれています(H16/5)。

文化勲章・瑞宝章

西田幾久彦氏より寄附
西田博士が、昭和3年に受章した瑞宝章、昭和15年に受章した文化勲章および各々の勲記を、そのお孫さんにあたる西田幾久彦氏より寄託していただきました(H16/6)。



図書の寄附

その他にも次の方々から、たくさんの図書の寄附をいただきました。寄附いただいた図書は、哲学館図書室の蔵書として閲覧・貸出ができます。

興村博子氏、大東俊一氏、竹村牧男氏、大橋良介氏、竹本忠利氏、岡崎文明氏、西脇隆治氏、安田暁男氏、坂本清氏、秋富克哉氏。
(寄附日順)

購入しました

直筆書簡;石井光雄宛

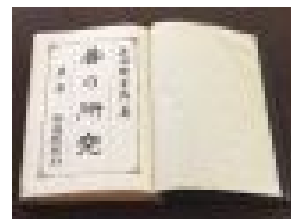
封筒2通、ペン書5枚
西田博士が、実業家・勸業銀行総裁であった石井光雄氏に宛てた書簡(便箋ペン書5枚・封筒二枚付)を購入しました(H16/12)。



『善の研究』初版本

贈呈サイン入り

西田博士の四高教授時代の同僚であり田部隆次(富山大創設者の兄)に対して贈られた『善の研究』初版本で、「呈 田部学兄 著者」の記載があるものを購入しました(H16/12)。



編集後記:

哲学館は海に近い砂丘地の上に建っています。夏は涼やかな風が吹きますが、冬はその風が冷たく、辛いものです。冬の幾日かは、風と雪で館のガラス壁の外が真っ白になることもあります。しかし、こんな日は来館者もいないだろうと思っていると、吹雪の中でもお客さんが来られます。曰く「東京から来ました、今日しかないんです」。ガラス張りの哲学館、特に展望ラウンジからの雪景色を堪能して帰られました。

寒い冬も終りに近づきました。そろそろ春風が吹き「哲学の杜」にも梅・木蓮・桜が咲きます。鉛色の雲の隙間からは鮮やかな青空が見え隠れし始め、丘を吹く風も少しずつ暖かくなってきました。(大熊)

発行・印刷:

西田幾多郎記念哲学館
TEL 929-1126 石川県かほく市内日角井1

TEL (076)283-6600 FAX (076)283-6320
E-mail: nishida-museum@city.kahoku.ishikawa.jp



発行年月日: 2005年3月12日